

アメリカにおける「政治的妥当性」 (Political Correctness) の文脈

藤 本 規 夫

Context of "Political Correctness"

Norio Fujimoto

political correctness; politically correct の辞書的定義は次のようになっている。

political correctness politically correct であること, 略: PC; **politically correct** 1 <言葉や表現が>政治家が口にできる, 差別的でない, 偏見を含まない。2 ((しばしば引用符つきで)) 表面的に差別を排除したように見せかけた, 差別 [偏見] に触れない; 言葉狩りに引っかけられない, 言葉だけ取り繕った。3 環境, 動物保護, 堕胎, 生命, 人権などについて正しい [物議をかもしない] 表現をする [態度を示す], 略: PC (ランダムハウス英和大辞典, 第2版, 小学館)

political correctness *n.* 政治的公正 (従来の欧米の伝統的価値観や文化が西欧・白人・男性優位であったことの反省に立ち, 女性や, アジア系・アフリカ系・ラテンアメリカ系などの住民, アメリカインディアン, 同性愛者などの社会的少数派の文化・権利・感情を公正に尊重し, 彼らを傷つける言動を排除しようとすること; 略 PC: **politically correct** *a.* 政治的に公正な (リーダーズ・プラス, 研究社)

political correctness (表現・語句の) 政治的見地からみた正しさ (略 PC); **politically correct** <表現・語句が>政治的・社会的見地から見て正しい, 人種・性などに関して差別的でない (ジーニアス英和辞典, 大修館書店)

politically correct conforming or adhering to what is regarded as orthodox liberal opinion on matters of sexuality, race, etc.: usually used disparagingly to connote dogmatism, excessive sensitivity to minority causes, etc. — **political correctness** (Webster's New World Dictionary, Third College Edition)

politically correct *adj.* 1. Of, relating to, or supporting a program of broad social, political, and educational change, esp. to redress historical injustices in matters such as race, class, gender and sexual orientation. 2. Being or perceived as being overconcerned with this program, often to the exclusion of other matters. — **political correctness** *n.* (THE AMERICAN HERITAGE COLLEGE DICTIONARY, Third Edition)

英和辞書の定義は「(表面的な見せかけも含めて, 表現や態度が) 差別的でないこと, 偏見を含まない」に集約できる。一方, 英英辞書は「性, 人種等に関して正統的で進歩的と考えられている意見に合わせる: 通常, 教条主義や少数民族等の主義主張に敏感すぎることに對する

非難語として使われる」(Webster's New World Dictionary, Third College Edition), 「1. 特に, 人種, 階級, 性別, 性的指向等に関連する歴史的な不公正を正すための広い意味での社会的, 政治的, 教育的変化をもたらすプログラムに関する, またはそれを支援する 2. しばしば他の事柄を除外さえして, このプログラムに過度に関心を持つ, またはそのようにみなされる」(AMERICAN HERITAGE COLLEGE DICTIONARY, Third Edition) となっている。英和辞書の「差別的でない」「偏見を含まない」などの言葉は英英辞書の「進歩的」「不公正を正す」の意味するところと共通する部分があるが, 英英辞書にある「教条主義や……敏感すぎることに対する非難語」とか「……過度に関心を持つ, またはそのようにみなされる」という強い否定的なニュアンスは英和辞書からは感じられない。

では, political correctness や politically correct (あるいは反対語の political incorrectness, politically incorrect) という言葉が実際にどんな文脈で使われているかを, アメリカの新聞・雑誌の記事で見ることしたい。以下に取り上げた記事(要約)は, できるだけいろいろな分野にわたるように配慮したが, これらを通して具体的な PC の実態の一端と批判者側の立場が多少とも明らかになるものと思う。

1. “Let’s address sexism in schools” by Ellen Goodman (Asahi Evening News, 1994/3/6)

アメリカの学校で女生徒が男生徒に比べて最初は学力的に優れていたのに, だんだん追い越されていく原因の研究発表がでた。主要な原因は次の通りである。

- 1) 先生と男生徒との交流は女生徒との交流の8倍も多い。
- 2) 男生徒が当てられる場合のほうが多い。
- 3) 女生徒に与えられる応答時間は男生徒に与えられる時間より短い。
- 4) 男生徒は, 頭がいいといってほめられ, 女生徒は, きちんとしている, かわいい, すなお, やさしいといってほめられる。
- 5) 先生は女生徒には直接手伝ってやるが, 男生徒にはやり方を教えるだけである。

この調査結果に対する親と先生の反応は二つに分かれている。ひとつのグループは, 「私達に資料を提供して欲しい。気になる問題だ」と言い, もうひとつのグループは, 「この分析は PC 推進派の形を変えた攻撃だ (another attack of *political correctness*)」と相手にしていない。

しかし, この研究の意図は, 教室の中の見えない部分でなにが起こっているか, をはっきりさせること, 教員と親に変化を起こすための道具——もっと公平でより改善された方法——を与えることである。これを発表した学者は「これは PC でなく, EC だ」(This isn't P.C. It's E.C. It's educational correctness.) と言っている。

2. “Culture warriors smite ‘Lion King’” by Tony Snow (The Plain Dealer, 1994/8/2)

1994年に大評判となったディズニー映画「ライオン・キング」(Lion King) が, 性差別 (sexism), 人種差別 (racism), 同性愛者嫌悪 (homophobia) などの観点から批判を受け, また「文化戦争」(culture war) が始まった。批判者の言い分は次のような具合である。

- 1) 主人公のシンバが, 悪者のスカーおじさんから雌ライオン達を助けるのは, 性差別の匂いがする。シンバのような王子が王位につきさえすれば世の中がまるく収まるような描き方は,

家父長主義の賛美 (a paean to patriarchy) でもある。

2) 悪役としてでているハイエナは、正に都会の黒人の姿と重なるし、スカーおじさんの仕草は女性的で、同性愛者らしい言葉つきである。これは人種差別であり、同性愛者嫌悪である。シンバのたてがみが赤で威厳があるのに対し、スカーおじさんのは黒いのもひどい偏見の表われである。

「ライオン・キング」に対するこのような攻撃は、現代のアメリカ文化の分裂状態を表わしている。まず、PC 派のいらだち (the peevisness of the *politically correct*) がある。ライオンのたてがみの色についてとやかく言う人たちは、映画の筋を追わずに、想像力を働かせながらどこかに侮辱的な場面がないかと探すのに忙しい。まさに「多様化運動」(diversity movement) 全体が、なんでもない言動の中にもなにか気にさわる要素はないかと探す運動になってしまい、社会そのものを無数の集団に分裂させてしまった。詐欺師まがいの感受性訓練業者 (sensitivity scam-artists) は、肌の色、家族的背景、病気などを理由にして人間同士が不信に陥る方法を教えることですごい財産を築いている。

こうした動きから生まれた「悪意に満ちたエチケット」(vicious etiquette) にだれもがピリピリしている。ワシントン D.C. の不動産業者は、家を売るときに使ってはいけない57の単語のリストを渡されている。次にあげるのはその一例である。括弧内は使えない理由。

master bedroom (過敏な客が奴隷制度を思い出す可能性があるから)

estate (同上)

home's view (視覚障害者への配慮の必要性から)

lovely trails and hills (車椅子使用者の感情を害する可能性があるから)

shelter (ホームレスの人達に恥ずかしい思いをさせる可能性があるから)

補記：上の PC 語は巻末に参考文献としてあげた3種類の辞書にはでていない。

3. “Smithsonian puts a ‘PC’ foot forward” by Michael Shanahan (The Plain Dealer, 1994/8/23)

ワシントン D.C. にあるスミソニアン自然・歴史博物館 (Smithsonian Museum of Natural History) を訪れる人は、PC についての授業 (a lesson in *political correctness*) を受けに来るわけではないはずだ。しかし、同博物館のアフリカ産カモシカの剥製展示場の前には、「雌の動物が雄の動物より劣っているかのような展示になっている」(Female animals are being portrayed in ways that make them appear deviant or substandard to male animals.) とわざわざ掲示しており、さらに、他の動物の展示も「人間の方が他の動物より重要であるかのような表示をしているので問題がある」とまで付記している。ここでは、人種、性別、歴史、環境問題及び人間性に関する文化面からの議論が熱をおびており、アメリカ人が自分達自身と自分達を取り巻く環境に対する見方を変えようとする動きがあるが、だれもがそれに同調しているわけではない。同博物館の関係者の一部は、展示内容について、次のような問題点を指摘している。

1. アフリカの草原で、牡ライオンが地平線を睨みつけ、しま馬でも狙おうとかまえている。雌ライオンは、子供たちに囲まれて地面に伏したままである。これは、雌ライオンは棲み家に残り、牡ライオンが狩りに出かけるという、イメージを与える。しかし、実際に狩りをするのは、雌ライオンのことが多いのに、そのことには触れていない。

2. 1609年にバージニアに到着したジョン・スミス船長 (Capt. John Smith) が、先住民パウ

ハタン族 (Pawhatan Indians) に迎えられる様子を示す展示は、ヨーロッパ中心主義 (Eurocentrism) の典型的な例である。なぜなら、スミスと彼の部下達は強力な支配者のように見えるのに対し、先住民は弱々しく、なんの値打ちもなくて、つまらない品物と土地を喜んで交換しているように見える。しかし、実際は彼ら先住民は豊かで、古くからのしっかりした文化を持っているのである。

3. 同博物館の目玉展示である巨大なアフリカ象にも問題がある。この象は1955年に射止められ、剥製にされたものだが、今や多くの訪問者がいつまでも覚えているような中心的な展示物である。しかし、この展示物は金持ち連中がこの象を勝手に捕えたり、自分の物にしたり、戦利品のようにして持ち返ったりできるかのような印象を与えるのでよくない。鳥、木、昆虫、まわりの自然の音などに囲まれている象を展示し、この象とアフリカの草原での生活のほんとうの姿が見えるようにすべきである。

このような内部からの、政治的妥当性に欠く展示物という自己批判 (criticizing its own exhibits as *politically incorrect*) に対し、保守派の批評家や訪問者から脅迫の手紙が来ているだけでなく、解説文の掲示が破られたり、その上に落書きされたりしている。毎年7百万人が訪れるこの博物館の展示を、環境保護と多文化の時代にふさわしいものにする必要性と子供のときに見たものをもう一度見たいという多くの人の希望をどうバランスさせるかが、この博物館の頭痛の種である。

補記：動物に関する PC 関連語に次のものがある。

animalism (動物差別。動物権利擁護)：(1)動物は人間より劣る存在であるとして、動物を軽視・差別すること。(2)その正反対の意味—すなわち、人間は動物より優れた存在ではないとして、動物の権利を擁護し向上させる運動。

animalist：(1)動物の権利を擁護し、人権の一部を動物にも適用しようとする人々。(2)反対に、動物の権利を否定し、差別する人々。

animal activist; animal-rights activist; animal-rights advocate, animal liberationist：上の(1)と同じ。

animal lookism (動物の容貌差別)：チョウのような可愛い動物は愛護するが、ナメクジのようなグロテスクな動物を嫌悪すること。

nonhuman animal; nonhuman being; other animal：動物差別反対派が作った animal の言い替え語。

animal companion/companion animal (動物伴侶)：pet の言い替え語。

動物の権利保護運動を進めるイギリスの過激派は、牛などの家畜を生きたまま狭い船に乗せて欧州大陸に輸出するのは残酷である、と反対している (TIME, 1995/2/6)。また、アメリカの過激派 (People for the Ethical Treatment of Animals) は、ロブスターを生きたままゆでるのは残酷であるとして、魚市場でロブスターを買って東海岸に運んで逃がしてやる (liberating) 運動をしている (The Beacon Journal, 1994/12/31)。

4. “Schools: Don’t dress mean for Halloween” by Katy Kelly (USA Today, 1994/10/5)

ハロウインはもう子供だけのものではなくなった。PC 時代の今 (in this age of *political correctness*)、ますます多くの学校が生徒たちにある種の扮装を禁止している。

例えば、

- 1) 浮浪児 (hobo)
- 2) ポカホントス (Pocahontas)
- 3) 魔法使い (witch)
- 4) ジプシー (gypsy)
- 5) 悪魔 (devil)

- 6) 天使 (angel)
- 7) 肥満体の人 (fat lady or fat man)
- 8) ホームレス (homeless person)
- 9) インディアン (American Indian)

理由は、障害者や違う文化をもつ人を軽く見るような衣装は好ましくないこと、子供達が怖い夢を見るような衣装や人に攻撃を加えるようなものを真似るのは好ましくないからである。

ある副校長は、「時には PI もいい」(Sometimes, *politically incorrect* is OK.) 「大統領をからかうような扮装もあるが、政治的扮装 (political costumes) は理解できるし、問題ない」と言っている。

“Boo to spoilsports taking fun out of Halloween” by Scott Boedy (USA Today, 1994/10/14)

(これは上記の記事に関連した投書である)

子供たちに魔法使いや天使や浮浪者の扮装をさせない学校は一体どうなっているんだ。

どうも一部の人たちの PC は行き過ぎている。(Some people in this country have taken *political correctness* a bit too far.) これは相手かまわず自分の思うように支配しようとしている進歩派 (liberals) の責任だ。

子供はホームレスを浮浪者 (bums) とか酔っ払い (drunks) とか呼んでいるが、そんな扮装をしたからといって、アルコール中毒が病気だなどとあまり考えていないはずだ。天使や悪魔の扮装をしても、宗教団体のことを考えているわけではない。今は過敏な人が多すぎる。

いつか1990年代を振り返る時がくれば、その10年間は「人がどんな生き方をすべきか、すべきでないか」(how they should and should not live) に口だししていた馬鹿げた時代だった、と反省することだろう。

補記：ハロイーンの扮装について、別の記事 (“Here’s a real scary Halloween”, The Detroit News, 1994/10/24) では「白雪姫」(Snow White), 「シンデレラ」(Cinderella) などのディズニーキャラクターも問題含みであることを皮肉をこめて取り上げている。白雪姫は、昔からの弱々しい女性のイメージを子供たちに植え付けることになるし、シンデレラは、家庭崩壊の姿を見せつけ、離婚した人や再婚した人が気分を害するのではないか、という。

5. “Survey Finds That Most English Departments Include Classical Texts in Lower-Division Courses” by Mary Crystal Cage (The Chronicle of Higher Education, 1994/10/12)

大学の英文科では、古典の教科書 (classical texts) の代わりに最近の流行作家の作品 (trendy works) を使っている、という批判があるが、「現代言語協会」(Modern Language Association) の調査によると、下級学年では今でも伝統的な作家が多く読まれていることが判明した。この調査は、527の2年制及び4年制の大学を対象にしたもので、英米文学の授業で取り上げる時代に対する質問と同時に、定期的を使用している作品の作家を5人あげてもらった。その結果は次の通りである。

1) 英文学の授業ではチョーサー (Geoffrey Chaucer) の作品が最も多く読まれている。90%の英文科が彼の作品をあげた。

2) 米文学ではホーソン (Nathaniel Hawthorne) が最も頻繁に使われる5人の作家の中に

入っており、66%の英文科が彼の作品を定期的を使用していると答えた。

3) メルビル (Herman Melville), ホイットマン (Walt Whitman) をあげた英文科も多い。

4) モリソン (Tony Morrison) をあげたのは約2%。

5) アンジェロウ (Maya Angelou) をあげたのは1%以下。

そもそもこの調査が行われたのは、英文科の教授連中が「PCの時流に飛び乗って、古典を捨てて、話題性のあるものと入れ替えた」(English professors have jumped on the *political correctness* bandwagon and have thrown our classic texts and replaced them with topical ones.) と言う批評家の非難が間違っていることを証明するためであった。

しかし、「現代言語協会」は、調査結果の中に含まれる作家の内19%が黒人であること、これは20年前には考えられないことだった、と米文学の授業に変化が起きていることを認めている。

補記：PC推進派はいわゆる正典 (canon) が、D.W.E.M. (Dead White European Male) の作品に偏っていると批判し、「正典戦争」(canon wars) と言われるほど激しい論争を展開している。

その結果、「アメリカの3,535の大学で学問的・文化的革命がまき起きている」「それは多文化主義と多様化の名のもとに行われるアメリカ高等教育の根本的改革である」「その中核は、西洋文化が生んだ傑作からなる伝統的なコア・カリキュラムを、少数民族、女性、第三世界の著者の作品で味付けされたカリキュラムに置き換えることである」¹⁾

6. “No Peace for Enola Gay; Exhibit Now Has Anti-War Groups Up in Arms” by Eugene L. Meyer (The Washington Post, 1994/10/21)

ワシントンの米国立スミソニアン航空宇宙博物館 (Smithsonian's National Air and Space Museum) が、原爆投下50周年に合わせて1995年5月から実施予定の原爆特別展は、退役軍人たちを喜ばせる形で変更されたが、平和団体の反撃が激しくなってきた。原案では、広島に原爆を落としたエノラ・ゲイ (Enola Gay) と原爆の悲惨さを示す証拠品を展示することになっていたが、退役軍人団体などから、展示内容が「日本に同情的過ぎる」(too sympathetic to Japan) こと、説明文が「パール・ハーバーの復讐を決めた人種差別主義的アメリカ人によって犠牲となった罪もない日本人」(the Japanese as innocent victims of racist Americans determined to avenge the attack on Pearl Harbor) という描きかたをしているとして、批判を受けていた。今回の説明文の変更は4回目だが、博物館のPC的姿勢と歴史修正主義に対する攻撃が激しくなってきたために (as the exhibit came under increasing attack for its alleged “*political correctness*” and historical revisionism), 博物館側が自説を曲げた結果であるように見える。

反戦運動家たちは、原爆の惨禍を過小評価する方向への変更と戦後の核軍備競争にふれた部分の削除に怒りを表わしている。

補記：上記原爆展の経緯を補足するとつぎの通りである。

この原爆展は、スミソニアン航空宇宙博物館が、原爆投下の決定過程やその被害状況及び戦後の核軍備競争への影響などを、エノラ・ゲイを目玉とした展示と解説で示そうとしたものである。ところが、退役軍人の団体を中心に、議会やマスコミまで巻き込んだ反対運動がまき起こった。反対派はもともと展示計画が、原爆投下の正当性と必然性に疑問を投げかけるような内容になっているとして、博物館側に対し「歴史に修正を加える」ものであるとか、「PCを持ち込む」ものであるとかの批判を浴びせた。その結果博物館側が譲歩する形で展示内容の変更を重ねた。一方、反戦・平和団体は博物館側の妥協に反発し、またマスコミも賛否両論の議論を展開した。例えばニューヨーク・タイムズ紙は、退役軍人団体などの動きを「歴史のハイジャック」という表現で攻撃した (New York Times, 1995/1/30, “Hijacking History”)。これらの経過を経て、最終的にはエノラ・ゲイと少しの資料のみの展示に落ち着く結果となり、事実上の「原爆展中止」となった。

7. “PC: Almost dead, still funny” by John Leo (U.S. News & World Report, 1994/12/3)

PCの時代が終わった訳でない (*Political correctness isn't over.*)。PC推進者 (PC people) が、あまり反対者に笑われないようにと低姿勢になっているだけだ。彼等は自分でもどうしようもないのだ。PCが批判されながらも健在であることを示す例の一部を紹介する。

1) 動物解放主義者 (animal liberationists) による “The Great Ape Project” という本の趣旨は次の通りである。

「猿と人間は同等である」「チンパンジー、ゴリラ、オランウータンは被抑圧集団 (oppressed group) であり、拘束される場合にはしかるべき手続きを要求する権利がある」

2) ミシシッピ州の男が、出版者 (Oxford University Press) などを相手どり、聖書は黒人と同性愛者を抑圧するような伝聞 (hearsay that oppresses blacks and gays) の寄せ集めだという根拠で、4,500万ドルの損害賠償訴訟を起こしたが、資金不足で訴訟を取り下げた。

3) 「匂いを拒否する権利運動」 (olfactory rights movement) は人工的な匂いと戦いを強めている。香水、オーデコロン、デオドラントは嗅ぎたくもない匂いを無理に嗅がされる (a form of nasal oppression) ことになりかねないからである。

カリフォルニア州サンタ・クルス (Santa Cruz, California) には、「無芳香環境」に関する条例 (“fragrance-free environment” ordinance) がある。マリン郡 (Marin county) では「悪臭からマリン郡を解放する市民団体」 (Citizens for a Toxic-free Marin) が公共の場からの匂い追放を押し進めている。サンフランシスコとオークランドでは匂いの強い香水をつけた人は公共の集會に参加できない。ミネソタ大学の社会事業学部 (The University of Minnesota School of Social Work) は学生に香水やコロンをつけないように指示している。

4) 主要新聞の不動産広告は PC に神経質になっており (PC sensibilities)、次の言葉は使わないようにしている。

ocean view (視覚障害者を傷つけるから)

walking distance (車椅子利用者を傷つけるから)

quiet neighborhood (周りに子供がいないという風にとられかねないから)

master bedroom (性差別的、覇権主義的だから)

executive (会社幹部の多くは白人なので人種差別的にとられかねないから)

そのうち使えなくなりそうなものは、次の言葉である。

swimming pool (水の嫌いな人の気持ちを傷つけるから)

half bath (ちゃんと風呂に入らない人を暗に批判しているから)

kitchenette (小さいことを示す単語を女性形で終わらせることを嫌う人がいるから)

5) 小学校一年の男子生徒が、彼のクラスの男子生徒9人を自分の誕生会に招待したいと思い、招待状を配ろうとしたところ、担任の先生が待ったをかけた。同教諭によると、女生徒を含めない招待は学校の「両性平等方針」 (school policies of gender-equity and inclusion) に反する、というものである。結局、その生徒は招待状を家へ持って帰らされた。

補記：上の PC 語は巻末にあげた3種類の辞書にはでていない。

動物愛護に関する PC 関連語については、80頁参照。

匂いに関する PC 関連語には次のものがある。

scentsism (芳香強要主義)：嗅ぎたくない匂いを無理に嗅がせること

smellism (体臭差別主義)：体臭を嫌うこと

8. “The (politically correct) Word of God” (The Wall Street Journal, 1995/9/5)

オックスフォード・ユニバーシティ・プレス (Oxford University Press) は今月、「新約聖書と詩篇」(New Testament and Psalms) の新訳を出版したが、これは「神の言葉」が PC でない (the Word of God isn't *politically correct*) という批判に応えたものである。具体的な変更箇所の例は次の通りである。

1. 家族関係を示す場合、女より男を優位に扱っていたのを改め、妻の存在がわかっている時は、夫の名前に妻の名前を加えた。
2. 暗黒は悪で光が善 (darkness as evil and light as good) であるという比喩は、黒人に不快感を与えるので使わない。
3. 身障者に対して無神経な “the blind”, “the deaf”, “the lame” という言い方は, “those who are blind” などと言い替えた。
4. “right hand of God” という表現は左利きの人に不公平となるから, “mighty hand” に替えた。
5. “slaves” は “enslaved people” に替えた。
6. 親が子供を “discipline” する, という言葉は不適當なので, “guide” に改めた。
7. 逆に子供が親に “obey” する, という言葉は不適當なので, “heed” に改めた。
8. 神を代名詞で呼ぶことを止めて, 性の区別のない “God” を繰り返し使用した。また神の別名である “Lord” と “King” は, “Ruler” または “Sovereign” に替えた。さらに家父長主義的な “Kingdom of God” は, “Dominion of God” に替えた。神を “Father” と呼んでいる箇所は, “Father-Mother” に替えた。
9. イエス・キリストの呼び名である “Master” は “Teacher” に, “Son of Man” は “the Human One” に替えた。

現在、大学のキャンパスで勢いづいている文化的、言語的極端主義 (cultural and linguistic extremism) は教会にも及んできた。今回の「PC 翻訳」(PC translation) は、ずっと親しんできた聖書の言葉の威厳を台なしにするかもしれないが、この新訳が特に大学のキャンパスで新しい読者を引き付けるとすれば結構なことである。どんな版であれ聖書が読まれるのはよいことだから。

補記：この新しい聖書の正式名は “THE NEW TESTAMENT AND PSALMS: An Inclusive Version” で、6 人のアメリカ人聖書学者によって改訂されたものである。改訂版をだした理由を、「まえがき」に二つあげている。一つは、聖書に使われている翻訳語そのものが変化していること、もう一つは、聖書の原語の研究が進んでいるだけでなく、既存のものより古くて信頼性の高い資料が発見されて、いままで以上に正確な翻訳が可能になったこと、である。

「非性差別語」(non-sexist language) を採用した最初の主要な教派はメソヂスト派である。同派は1992年の年次総会で「性的に偏りのない神」(God without sexual bias) という概念を採用し、同時に「母なる神」(God the Mother) (God our Mother) という呼び方を認める決定をした²⁾。昔から「神」の人種、民族、年齢は特定しようとしなかったのに、性別を決めることは問題ないと考えられていたようだ。しかし、神学上「神」が男性であると規定されたことはない。聖書のヨハネ 4 : 24には “God is pure Spirit” とあるし (従って、無性)、ギリシャ語やヘブライ語では「神」という語は中性である³⁾。

9. “Pew debate: Hymnals or hernalns?” by Bill O’Connor (The Beacon Journal, 1995/11/25)

ユナイテッド・チャーチ・オブ・クライスト (the United Church of Christ) 教会が、賛美歌の改訂版 (the New Century Hymnal) を出した。この新しい賛美歌集では、神はもはや “master” でなく、“Lord” と呼ばれることもめったになく、父ではなくて “father and mother” となった。また古い賛美歌は新しい歌詞に変わり、新しい賛美歌がつけ加えられ、歌われなくなっていた賛美歌が復活したりした。編纂責任者によると、「神の姿に似せて創られたのは、男性だけではなかった」(not just males are created in the images of God) ことを示すのが、この賛美歌集の目的であり、「この事実を言葉の上に反映させなければならない」(Language should reflect that truth.) しかし、「この新版はただ PC の流れに乗ったものではない」(This is not some trendy hymnal, some 20th-century P.C. (politically correct) hymnal.) と明言している。

具体的な言い替の例をあげると、

“Father Almighty bless us” で始まる同名の歌は、出だしはそのまま残してあるが、3番の最初は “Father of mercy” を “Mother of mercy” に、“Faith of Our Fathers” という歌は “Faith of the Martyrs” に変更。“thees” と “thous” は “you” に変更。暗黒を悪の比喩として、また光を善の象徴として使うことを意識的に避け、黒を悪、白を善とする表現をなくすような変更も行われた。

結 び

現在の PC 論争においては、PC という言葉は PC 推進派が自分たちの考え方や行動を表現するのに使うのではなく、反対派 (右派) が PC 派 (左派) をひとまとめにして非難・攻撃する場合に使われることが多い。特に PC 過激派は、旧来の価値観や伝統的思考を排除するという偏狭さを持つ傾向があり、それが言葉狩り、議論の封殺にまでつながることがある。これに対する攻撃あるいは揶揄の武器として、反対派によって PC という言葉が利用される。このことは上記の例にもよく表われている通りである。ナイジェル・リーズ (Nigel Rees) によれば、「自尊心の強い PC 警官は、自嘲のとき以外はもう PC という言葉は使わないだろう」(No self-respecting PC policeman would now use the term ‘politically correct’, except in self-mockery ...) なぜなら、「この言葉はすでに敵の所有物になってしまったから」(The term has become the property of the enemy.) 「しかし、PC 推進派は確かに存在する。ただ、今日では自分たち自身のことを PC 推進者と呼ばないだけだ」(But, yes, PC enforcers do exist, even though they would never identify themselves as such nowadays.)⁴⁾ また、キャサリン・バートレット (Katharine T. Bartlett) は、「PC という蔑称的なレッテルは、PC 反対派が憲法修正第一条を利用して道義的に有利な立場を確保しようとする努力の表われである」(The pejorative label “political correctness” represents an effort by PC critics to seize the moral high ground of the First Amendment.)⁵⁾ と言っている。

では、PC は今後どんな展開をするのだろうか。PC 反対派とのせめぎ合いがどんな結果をもたらすのだろうか。「機会の平等」か「結果の平等」か、「集団の権利」か「個人の権利」か、といった二者択一的な答えで解決するほど単純な問題ではないことは明らかであるが、それぞれの立場・主張に内在する矛盾や不合理性を極小化しながら両者のバランスをいかに保つかが課題であろう。今回に引き続いてさらに事例を集めて PC 運動の現状と反対意見を分析し、そ

の上で今後の方向の見きわめを行うことにしたい。

注

- 1) Dinesh D'Souza, "The Visigoths in Tweed" in Patricia Aufderheide (ed.), *BEYOND PC: TOWARD A POLITICS OF UNDERSTANDING*, Saint Paul: Graywolf Press, 1992, pp. 12-13.
- 2) Nigel Rees, *THE POLITICALLY CORRECT PHRASEBOOK*, London: Bloomsbury, 1993, p. 63.
- 3) Rosalie Maggio, *THE BIAS-FREE WORD FINDER: a dictionary of nondiscriminatory language*, Boston: Beacon Press, 1991, pp. 119-120.
- 4) Nigel Rees, *THE POLITICALLY CORRECT PHRASEBOOK*, London: Bloomsbury, 1993, p. vxii.
- 5) Katharin T. Bartlett, "Surplus Visibility" in Patricia Aufderheide (ed.), *BEYOND PC: TOWARD A POLITICS OF UNDERSTANDING*, Saint Paul: Graywolf Press, 1992, p. 122.

参 考 文 献

- 1) Henry Beard and Christopher Cerf, *THE OFFICIAL POLITICALLY CORRECT DICTIONARY AND HANDBOOK*, New York: Villard Books, 1993
- 2) Nigel Rees, *THE POLITICALLY CORRECT PHRASEBOOK*, London: Bloomsbury, 1993
- 3) Patricia Aufderheide (ed.), *BEYOND PC: TOWARD A POLITICS OF UNDERSTANDING*, Saint Paul: Graywolf Press, 1992
- 4) Rosalie Maggio, *THE BIAS-FREE WORD FINDER: a dictionary of nondiscriminatory language*, Boston: Beacon Press, 1991
- 5) Victor Roland Gold, et al., (eds.), *The New Testament and Psalms: An Inclusive Version*, New York: Oxford University Press, 1995

—平成8年9月30日 受理—